野上弥生子の日記について

ブリジット・ルフェーブル

はじめに

野上弥生子（本名野上ヤエ）は明治の文豪、夏目漱石の門下だった。明治 19 年に九州の臼杵に生まれて、昭和 60 年に亡くなった。そして長い人生を通じて膨大な作品を残した。特に有名な作品には『真知子』、『迷路』、『秀吉と利休』などがある。

何故、野上弥生子の日記[1]を選んだかというと、この日記が 1923 年から 1985 年まで、つまり 62 年間にもわたってかかれた、とても長い日記であるからだ。日本では主に、平安時代から鎌倉時代に日記が書かれ、土佐日記をはじめとして、蜻蛉日記、紫式部日記、更級日記など、かな書きで、女性の手になるものが多い。従って女性の視点で書かれた野上弥生子の日記は、二十世紀の日本と日本人を理解する上で、欠かすことのできない資料だと考えた。しかし、岩波書店の 19 冊の本を見ただけで、その膨大さに驚きめまいがした。どこから手をつけたらいいのか、迷った。テキストの内容を読み進めながら、まず日記を書くことの意義や日記を読む意義について考えることが必要だった。つまり、野上弥生子がどのような方法で、そしてどんな意図を持って、どんな立場で、日記を書き続けたか。そしてなぜ、その死後、日記を出版するようにしたか。また、読者はどのような目的で日記をよむのか。これはすべて詩学や解釈学に属する問題である。最近、日本でもフランスでも、日記などの自叙伝についての研究が進んでいるので、私の博士論文の課題の一つは、フランスの自叙伝についての研究方法が、どこまで、日本の日記に当てはまるのかということだった。

発表は三つの部分にわかれている。

まず、第一に、＜日記＞というジャンルを定義したいと思う。

第二に、野上弥生子とその日記の創作面を考察すること。日記帳のフォームや執筆のリズムや文字の体系、その編成、表現方法などを、要点だけをかいつまんで検証したいと思う。

第三は、日記と読者の関係についてで、これは日記のレセプションや解釈に深く関わってくる。つまり、日記を読んで、野上弥生子と読者の間に生まれる「自伝契約」の特徴を明らかにすることだ。「自伝契約」とは、フランス日記研究の第一人者である Philippe LEJEUNE が考え出した、日記作者とその読者の間に生まれる特別な協定、フランス語で «Pacte autobiographique»[2] とよばれる定義の日本語訳である。日記は客観的なテキストとして読まれるが、記述されたものは主観的な経験なのか、文学なのか。どこまでが真実なのかという問題点が残る。

最後に野上弥生子は作家なので、この日記を彼女の小説や随筆と比較検討することで、その創作活動の全体のプロセスが理解しやすくなると思う。

1. 日記とは

日記とは何か。

小田切進の定義を引用してみる。「もともと日記はその時々の出来事や、体験、その感動などを、日を追ってしるしておくもので、誰もが何を書いておいてもいい。[...] 自分のためでも、子供のためでも、後に発表することを目的として書かれてもかまわないはずです。旅行記もあり、航海記あり、軍隊日記、戦記、絵日記、歌や句の日記あり、有名、無名の日記もあり、いずれも体験に深く根ざしているものだから、文学作品になっているかどうかは別として、なにかそこには、われわれに語りかけるものがあります。」[3] 小田切進の説明によると、日記というジャンルはリアリティと文学の中間に位置する特別な存在だといえる。主観的な体験として、本当のリアリティでもないということと、それに、できるだけ客観的に書こうとする意図があるので、文学でもないという問題がある。従って、複数の解釈が必要だと思われる。つまり歴史的解釈や社会学的解釈や文学的解釈などの分析の必要があると考えられる。それでは文学的解釈とは何か。

大概にして、日記を付ける人は（永井荷風は別として）文学作品を書こうというのではなく、ただ個人の生活のできごとなどを忘れないように、時に証言として書いたり、伝えようとするものだと思う。いずれにしても、有名、無名を問わず近代の様々な人々は日記を通して、自分の独自の日記記録の体系を作って来た。この体系とは各自が自分の日記の中で内的世界と外的世界を組み合わせるために作り上げるシステムのことだと言える。詩学（ポエテイック）とはこのシステムを検討することである。

2. 野上弥生子の日記

日記とは、物と実践とテキストという 3 つのものを

体現している。

（ア）野上弥生子は日記帳として、普通のノートを使った。彼女はまず日付を書いて、天気を記すことから始めるという初歩的な規則を最後まで守った。日記帳は 119 冊にも登る。原稿やそのファクシミリを検討すれば書き方の変化が明らかになるだろう。

（イ）実践としての日記
彼女が一年間に書き上げたページを数えて、グラフを作ってみた。縦の軸はページ数で、横は年。年平均は 200 ページになる。三つのピークが見られる。まず 1938 年で、欧米に旅行した年だ。次のピークは 1944 年から 1945 年の二年間で、戦争が激しくなって、小説を書く余裕も自由も奪われて、日記を書くことに専念していたからだと思われる。最後のピークは 1965 年で、病気と社会的な事件が重なったために小説を書くのを休んで、また日記に専念したと思われる。

野上弥生子の日記を前半と後半にわけてみると、後半は 70 歳から始まっている。つまり半分以上が 70 歳以降に書かれたごくまれな日記だと言える。

（ウ）テキストとしての日記
日記にはいろいろなテーマがあって、景色、家族、生活の風景、人間関係、内的世界、自己反省、日々の読書、知識、いろいろな情報や外的世界などが描かれている。

3. 日記とその読者

第三に、日記としての機能を考察してみたい。日記について野上が書いたいくつかのコメント（メタテクスト）を調べることで、彼女がどのような意図で 62 年間も日記を書き続けて、死後それを後世に伝えようとしたのか、その理由が理解できると思われる。日記以外のテキスト、つまりエピテクストの中から三つのテキストを例として選択した。

一つ目の作品は1942年に出版された『欧米の旅』で、著者の前書きを読むと、何故自分の日記を発表したのかが明らかになる。

ア）その理由の一つ目は危機感だ。
「思えば私たちの旅行は、平和な世界を見た最後の機会であった（…）今日となってはよいことをしたと思う。私たちの勢力のもとに置かれることになった土地の面影を、わずかでも読者に伝えられるわけだから。」[4] この文章によって、著者の危機感がはっきりと読み取れる。

イ）二つ目の理由は知識欲だ。
「知ることはいかなる場合にも必要である。味方にするも、敵に廻すも、その本来の姿を常に正しく捉えなければならない。また捉え方にしても、政治や、経済や、軍事のみでは不完全である。勿論またそれらの角度からする批判や把握は、私の力の及ぶところではないが、少なくとも文化を愛し、文化の促進に携はるものとしての私の眼に映ったさまざまな国の影像は、今後それがどんな変貌をなさうとも、「かくあった」ことを知らせる点で役立つに相違ない。」[5]

ウ）三つ目の理由は彼女の義務感だ。
その知識欲は野上弥生子の作品全体にに表れているが、自分が知るべきだけでなく、他人にも伝えたいという義務感が感じられる。

「当分の間、一般的には外国に旅することなど出来そうもない事情におかれている際であればあるほど、私が世に送ろうとするこの書き物は、ひろい意味においては私の職域奉公でもあると信じている。」[6]

二つ目の作品は『山荘記』[7] で、1944 年十一月三日から翌年の十一月三日までの北軽井沢山荘における日記である。その後書き(1953 年)を読むと、作家の切なる願いが、今でも、私たちの心に伝わってくるようだ。

「さて終わりに、私は何故こんな日記を公けにするだろう。理由はただ一つしかない。二度とふたたび私たちがこんな私録を書くような日があってはならない。それだけでもあり、それがまた私の祈りである。原爆、水爆の投下となれば、その惨禍はここに書き留められたようなものにはとどまらない筈である。」[8]
つまり、著者、野上弥生子は、人間が二度と、同じ過ちを繰り返さないことを願って、日記という媒体を通して、世の中に課題を残したと言える。

三つ目の例は『迷路』（1936-1956）の中にある。

戦争へ行く前に慎吾という二十歳の男の人が書いた日記は、日記を書く人と読者の間に生まれる、先ほど言及した「自伝契約」の具体的な例である。慎吾の家族と友達の管野さんの家族は敵同士の家族で、その拮抗は世の中の戦争のメタファーとして理解できると思われる。慎吾の日記を引用する。

「友達の管野さんに日記を送る約束をしてある。戦死したらその時読んでもらい、管野さんの手から父にでも、兄たちにでもとどけることを頼もうと思う。管野さんは僕の願いを果たしてくれるに違いない。管野さんが家に訪ねて来られ、父母や兄たちが客として迎える。こんなことが、夢にも考えられるだろうか。僕の死がきっとそれを可能にさせる。それがある日の、ほんの一度の機会で終ろうとも、家と家の不思議な拮抗と敵対のあいだに、はじめて一つの花を投げ込む。血

にまみれて死にかけていても、その想像だけは、純粋に僕を愉しませ、満足して、眼が閉じられそうに思える。」[9]

慎吾の死後、管野さんが日記を受け取って、慎吾の家族に届けにいった時、次のように言う。「見方では一種の遺書ともいへますから、それをお読みになれば、すべてがお分かりになるでしょう。」つまりこの時から、日記の新しい運命が始まるともいえる。

また「迷路」のなかに次のような説明も見られる。「表紙の横線いっぱいに MEMORANDUM とゴチック活字をならべたように書き、下に S・I[10] とだけあった。」[11]

結論として言えることは、弥生子はその小説（フィクション）や随筆を通して、すでに、日記の機能の一つでもあるメモランダムの機能を先駆けしていたというのが、私の仮説だ。そして日記を読む私たち読者は、その証言を受け取って、真実を知って、それをまた、他者に伝える義務があると思う。これが読者である私たちが、ヒューマニストであった野上弥生子との間に結ぶことのできる「自伝契約」ではないだろうか?

注

1. 『野上弥生子日記』野上弥生子全集 2、1－19 券、岩波書店、東京、1986－1990 年
2. Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique*, Seuil, 1975（フィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』水声社、1993 年）
3. 小田切進『近代日本の日記』講談社、東京、1984 年、p. 9－10.
4. 『欧米の旅』in 野上弥生子全集 1、岩波書店、東京、1980 年、16 券、紀行 2、p. 4
5. Ibid. p. 7-8
6. 『欧米の旅』in 全集 1、16 券、p. 8
7. 『山荘記』と『続山荘記』昭和 20 年と昭和 21 年に出版されて、昭和 28 年、暮らしの手帳社から『山荘記』として再発表された。
8. 『山荘記』in 全集 1、20 券、p. 145
9. 『迷路』in 全集 1、11 券、p. 232
10. 慎吾・伊藤
11. 『迷路』in 全集 1、11 券、p. 243

Brigitte LEFÉVRE／Post-Doctorante, CRCAO